
姫の守り神

ハナモト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫の守り神

【Nコード】

N4354Z

【作者名】

ハナモト

【あらすじ】

ある日の朝、カルシアが釣りに行ったら一人の女性が流されてきた。嫌々ながらも彼女を助けたカルシアは自然と彼女の大きな問題に巻き込まれていく

01 流れてきた女

いつもどおりの朝だった。

何の変哲も無い朝だったのだ。

だけれど今日は勝手が違う。

俺はいつも通り、今日の食事を取ろうと川へと向かったただけだ。

流れが少し速いものの、穏やかで大きな川。

随分と繰り返し返した動作で釣り糸を垂らし、すでに二時間ほどが経っていた頃。

十分に食事を釣り上げ、後一匹で終わりにしようと思っていた頃。なんで切り上げなかったのかと、後から酷い後悔に苛まれてしまった……

「……なんだ、あれ」

思わず呟いてしまう。

川の中ほどをゆらゆらと黒い物体が右から左へと流れていくのが目に入った。

汚れのまったく無い綺麗な川には似つかなく、遠くからでも酷く目立って見えた。

じっと目を細める。

あまり見たことの無いものだった。何かよく分からない。

なんだろうかと考えて、ようやく一つの答えに辿り着いた。

「……人、かな？」

木の枝か板かを抱くようにしている人に見えた。

自信は無い。

とはいえ人だとしたらさすがに放っておくわけにもいかない。少し悩んだものの、服を脱ぎ捨てて助けに行く。

川は子どもの頃からの遊び場だ。泳ぐことに何の問題も無い。

勢いをつけ飛び込むと黒い物体にまで近づいていく。

流されていくその物体にすぐに追いつき、ようやくはっきりと物体の正体を見る事ができた。

それは黒い服で男装した長い黒髪を蓄えた女性だった。それも飛び切りの美人。

しかしそれを喜ぶ気にはなれない。

「やっぱり人間か……」

少々の嫌悪感を感じながらも抱え込む。女性独特の柔らかな感触が腕の中に広がった。

岸まで何の問題も無く辿り着くと、すぐに女性の呼吸を確認する。さすがに川の中でそんな確認をする余裕は無かった。

「……息があるな。気失ってから川に落ちたのかな？」

一人ごちると脱ぎ捨ててあった服を着て女性を背負う。思っていたよりも重さは無い。

釣り道具を取り、帰路に着いた。妙な拾い物をしてしまったと若干の苦々しさを感じながら。

ちょっとした森の中にある、住み慣れた小さな家に入ると女性の濡れた服を脱がせて体を拭き、自分の服を適当に見繕って着せるとベッドに寝かせておく。

すぐに家の外に出て石を組み、あらかじめ集めてあった枝を使って焚き火を作る。

人間を連れてきたこと以外はいつもの日常。

慣れきった手つきで火をつけ、釣ってきた魚の腸を小さなナイフで取ると順に焼いていく。

炎が目の前でゆらゆらと揺らめく。

魚が焼ける間に彼女の濡れた服を木の間に干し、女性の様子を少しだけ見ておくことにした。

たいして物を置いていない家に戻る。

目に付くのは壁に立てかけられた古い剣とベッドと、肘掛け椅子にいくつかの本。

その中で女性だけが異彩を放っている。異物のように思えてならなかった。

この家にあってはならないもの。

そんな感じが胸の中を占めていた。

女性の顔を上から覗き見る。人間自体を見るのがいくらかぶりで、かなり久しいことだった。

しばらく起きそうに無い。

嫌悪感以上の興味が無くなり、焚き火の元に戻る。魚は十分に焼けていた。

無造作に一つを取りほお張る。大した味も無い、食べなれた味でした。

三尾目を手に取った時、家の中の空気が動いた気がした。

手に取ったばかりの魚を戻し、意外と速かったなと思いながら家の中に戻る。

扉を開けると予想にたがわず、女性がベッドの上で上半身を起こしていた。

「起きたんだ」

声をかけ、家にたった一つしか無い椅子を持って近づく。

女性は驚きの目をこちらに向けている。何が起こったか分からない、そんな目だった。

「……ここは？」

「俺の家だよ」

ベッドの横に椅子を置き、そこに座る。

「川に流されてるのを見つけたんだ。何があったか覚えてる？」

優しく聞きたかったが、どうしても声音が冷たいものになるのを自分で感じた。

人間は信用できない。

頭の片隅で常に警鐘が鳴らされているのを感じる。

女性は少し考え込む表情を見せた。

「川……。ローヌ川？」

「そういえばそんな名前だっけ。呼ぶことも無いからはっきり覚えてないけど」

「……今日って何日？　ここってどの辺り？」

どうにも偉そうな態度で少しむっとする。別に感謝が欲しいわけでもないが、気に入らない女だ。

「……皐の十日だけど。ここはローヌ川の下流の近くで、クルーラント側」

一瞬、適当に言ってやろうかと思ったものの正直に答えてやる。

「皐の十日……。まだクルーラントね」

そういうと女性は勢い良くベッドから降りた。

「そう、分かったわ。ありがとう」

「もう行くのか」

思わず顔が綻びそうになるが、必死になんとか抑える。

「ええ。急いでるから」

女性は家の扉を勢いよく開けて外に飛び出して行く。

今度こそ口元に笑みが浮かぶ。自分から出て行ってくれたのだ、有難い。

ほっと一息つくと食事を再開するべく、家の外に出る。

すると勢い良く飛び出して行ったはずの女性が、家のすぐ前で固まっていた。その視線の先には彼女の黒い服が干してあった。

どうしたのかと思いながら後ろ手に扉を閉めると、女性がギギイという音を立てながら首をこちらに向けた。

「……あの服は何ですか？」

指を刺しながら訊いてくる。心なしか声が微妙に震えている気がした。

「あの服？」

「……あの黒い服。あなたのですか？」

どうにもよく分からないことを訊く。

「あれは君のだろ。見て分かんない？　大体、君の着てる服も俺のだし」

彼女は視線をゆっくり下げて、自分の服を見直した。
女性は完全に固まった。

「……どうかした？　俺の服が気に入らないなら、自分の服着て行けば？」

自分でもちよっと冷たいかなと思ってしまうような声音。
親切で変えてやったのに、その態度は無いだろう。

彼女が俺を真正面から見据えるようにして、口をパクパク動かす。
声は出ていない。

「……俺、口読めないから声出してくれる？」

彼女の口が止まり、一度大きく深呼吸する。そして意を決したような視線を向けてきた。

「……見たの？」

「何を？」

「何をつて……その、……私の体」

「ああ、見たけど？　そうじゃないと着替えさせられないし」

「何考えてんの！　気ぐらい使いなさいよ！」

と、耳鳴りのするような大声を発し、俺は耳を両手で塞いだ。彼女の顔は茹ダコのように真っ赤だ。

「……うるさいなあ。そんな大声じゃなくても聞こえるよ。濡れた服のまま寝かせとくわけにもいかないだろ」

「そういう事言っでんじゃないのよ！ 人の裸見なんて何よ、その態度！」

さすがにむかつ腹が立つ。

「助けられなくて、お前の方こそなんだよ。あのまま放っておいたらお前死んでたろうが」

「そんなの、私の裸見たのでチャラよ！ チャラ！ むしろ私の方が払いすぎたくらいじゃない！ 信じらんない！」

「ああ、そうかよ。もう何でもいいから、とっとと行けよ」

もはや苛立ちも隠せない。隠そうという気もなくなっていた。

とにかく彼女を立ち去らせることが肝要だった。

顔を真っ赤にした彼女はすぐに立ち去るかと思ったが、真っ直ぐに魚を焼いていた焚き火へと向かった。

黙って焚き火の傍に座ると、少し焼きすぎた魚をほお張り始めた。

「おい！ それは俺のだぞ。勝手に食うな！」

「いいじゃない、こんなにあるんだし。お腹空いたから貰うわよ。」

それに私の裸見たでしょ、これぐらいじゃ足りないわよ」

あまりの言い様に後ろから殴り飛ばしたくなったが、震える手をなんとか押さえて、深呼吸する。

何とか自分を落ち着かせると彼女の前に座り、あまり食べられないうちに食事に取り掛かる。

食べ終われば出て行ってくれるのだ、それまでの我慢と思い定めた。

彼女がじっとこちらを見つめる。顔はまだ赤い。

「………そういやあんたの名前、聞いてなかったわね」

「……カルシア」

「私はリーラね、よろしく」

すぐに分かれるのによろしくも無いものだと思い、俺は返事をしなかった。

「それにしてもこれ、まずいわね。食べれないほどじゃないけど」

我慢できるかどうか、自信が無くなってきた。

02 逃亡開始

「……あんたって私の事情、全く聞かないのね」

すでに魚を食べ終えたというのに木にもたれて座り、未だにここにいるリーラが不思議そうに訊いてきた。

俺からしたらそんなことより、何故まだ居るのが不思議でならない。

こちらもすでに食べ終えて、今は剣の修行をしている最中だった。彼女はその様子をじっと見ている。

「訊いたところで仕方ないから。リーラはもう行くんだろ？」

「そのつもりだったんだけどね」

さっさと行けと遠回しに言ったのだが、リーラには分からなかったようだ。

横目で見ると、指を組みながら人差し指で指遊びをしている。

「どうして行かないんだ？」

「……連れとはぐれちゃってね。よくよく考えたら、道、分からないのよ……」

「迷子ってことね」

呆れた、それでじっとしていたわけか。おまけに素直に案内を頼めずにいたようだ。

散々悪口に近いことを言っていたから気まずいのかもしれない。横目でリーラを見ると、やはり気まずそうな表情をしていた。

「……はあ、仕方無いなあ」

いつまでもここにいられても困るので振っていた剣を止めて鞘に納めながらそう言うと、リーラの表情が目に見えて明るくなった。

「ホント？ 連れてってくれるの？ ありがとう！」

とはいえ、まだ連れて行くとも言っていないなかったのだが、リーラの脳内では俺が連れて行くことに決まったようだ。ため息を一つ吐き、彼女に近づいていく。

ヒュッ。

小さく鋭い風を切る音が聞こえ、考えるよりも先に体が動いていた。

視線を左から右へ横切ろうとする何かを、鞘から剣を抜いた勢いで下から斬る。飛んできたのは矢だった。

それも真っ直ぐにリーラを狙っていた。

狙われた彼女自身は何が起こったのか分からず、キョトンとしている。

「こっちに！」

彼女の手を握り、飛んで来た方とは逆の方向の森へと入る。

ここだと弓矢はよっぽどの名手でも無い限り使えない。

「ちょ、ちょっと、どうしたのよ？」

リーラは今起こった出来事すら把握出来ていない様子だった。

「今、矢で狙われた！ お前、何に巻き込まれてるんだよ」

「え！ ホントに？ こんなに早く来るなんて……」

彼女の声音に明らかな恐怖の色が混じった。
いかにも気の強そうな人だったので意外にしか思えない。

「お前に敵は多いのか？」

「どういふこと？」

「どうもこうも無い、早く！」

自然と声が少し大きくなる。

「お、多いわよ……」

声音が弱々しい。彼女の呼吸も乱れ始めている。あまり長く走れそうに無いことは簡単に予想できた。

「分かった。――っ！ 危ない！」

慌ててリーラの腕を思い切り引っ張る。

「きゃっ！」

リーラが痛そうな悲鳴を上げたが、多少の痛みぐらいは我慢してもらわないとならない。

森の中だというのに、正確にリーラめがけて矢が飛んできたのだ。偶然かと思ったが、すぐに頭の中でその考えを否定する。

ここは最悪を考えた方がいい。森の中でも正確に狙える弓の名手。背後を振り返ると、背の高い男が走りつつ弓に矢をつがえているところだった。

さすがに走りながら矢を射ることはしないだろうが、やってしま

いそうな雰囲気を放っていた。

「こっちに」

進んでいた方向をほとんど直角に右へと変える。

敵が奴だけで無いなら挟み撃ちぐらい考えているかもしれない。

「こっちに行くのと逃げれるの？」

「あのまま行くよりはマシだ」

多くの説明をしている時間も無い。とにかく今は逃げ切ることが重要だった。

どんどんと、より木の多い森の奥へと入り込んでいく。

空を見上げると、雲ひとつ無い快晴。

暗くなればどうにでもなるだろうが、まだ昼にもなっていないなかった。

おまけに太陽が隠れてくれることも期待できそうに無い。

とにかく今は森の奥、アミシラ樹海へと進んでいった。

かなり走り続け、どうにかあの弓の使い手は巻いたようだった。

かなり木が茂った場所まで来てようやく足を止める。

「この辺りまでくれば、とりあえず大丈夫かな」

適当な木にもたれかかる。さすがに走りっぱなしで疲れた。呼吸が少し荒くなっている。

リーラはといえば木にもたれて座り込み、もう動けないといった様子だった。

とはいえここが安住の地というわけでもない。しかも昼を少し過ぎた頃でしかなので、まだまだ危険だ。
しかし少し話す程度の余裕はある。

「疲れてるとこ悪いけど、何があったか話してくれる？」
「……ちよつと、……待って……」

呼吸が全く整っておらず、確かにこれでは話せなそうだ。
じつと彼女が呼吸を整えるのを待ってやる。

「はあ、はあ、はあ……」

一緒に走っているうちに気付いたが、どうにも思っていたよりも歳が若そうだった。

二十ぐらいかと思っていたのだが、おそらく十代半ば。

「ふう……、もう大丈夫」

「大丈夫なのは分かったから、事情を話してくれ」
「ええ……」

少し逡巡する様子を見せた。

「どうした？」

「……あなたが危険になるから」
「今更それを言うのか」

すでにもう巻き込まれている。まったくもってなんでこんな目に遭っているのか、腹立たしいこと極まりない。

そもそも何故俺はリーラの腕を引いて逃げてしまったのか……
だからといって、目の前で殺されそうなのを放置するという選択

肢も無いが。

「……そうね。だけど、多分信じてくれないんじゃないかなって……」

「話してもらわないと信じようも無いんだけど」

「……そうね、うん。分かってる。でもごめん、話せない」

自然と舌打ちをしてしまった。リーラの言い様だと喋ろうか迷っているという感じだったが、この状況で黙られても困る。

「話してもらえないと対応のしようが無いんだけど」

もはや声音に怒りが混じるのを抑えられなかった。

彼女に会ってから不満ばかりだが、そろそろ我慢の限界に近い。

「君は一体どうしたいんだ？ 俺をどうさせたいんだ？」

「……ごめんなさい」

珍しく悄然とした様子で謝られ、振り上げた拳のやりどころを無くしてしまった。

「……分かった。詳しく話さなくていいから、状況だけ簡単に話して欲しい。リーラはどうしたくて、あいつは何なのか」

「……私は今、狙われてるの。だから国外に逃げようとしたんだけど、川に落とされちゃってね。さっきの弓の男は多分私を狙ってる奴の部下」

ようやく事情を話し始め、怒りが多少収まる。

「ストリアにでも行こうとしてたの？」

「ええ。さらにその向こうのファサリアまで行こうと思ってるわ」

事情は分からないなりに、多少は察した。つまりこの娘は国の中枢に関わる人物の親族なわけか。

国外に逃げるような理由なんていうのは、犯罪者か政争に敗れるかのどちらかぐらいしかない。そして犯罪者なら身柄は狙われても、命は狙われない。

「ふうん。となるともう国境は封鎖されてるかな」

「え？」

「泳いでいくのが速いんじゃないか？　ちょっと大きな川だけど、泳いで渡れないことも無いし」

国境にされるだけあって、かなりの川幅があるが流れはそう強くない。

だが言いながらも、人間にはきついかなと思ったが、予想にたがわずリーラは不審気な顔で首を横に振った。

「あんな川渡るなんて、とても無理。それに私泳げないし」

「……川に流されてて、良く助かったな」

気を失っていたことと、偶然顔が水面から出ていたのが幸運だったのか。

「まあいいや。とにかく夜までなんとかしようか」

「夜？」

「夜になれば何とかなるから。策はある」

「さくく？」

リーラは驚いた表情をした。というより不審気な表情だ。俺が考

えたのは策というほどのものでもないし、確実にうまくいくかも分からないが、できるだけ自信のあるように言う事だ。

自信が無いと思うより、自信があると自分で思い込むために。

「本当にあるの？」

「たいした事はない。ようはうまく逃げようって事だから。それをやろうとしたら太陽が出てる間は無理なんだよ」

「へ〜……」

どうにも気の抜けた返事だ。信じているのかいないのか、よく分からない。

もしかしたらおそらく彼女は状況を正しく把握仕切っていないのかもしれない。

リーラが犯罪者でなく政争で負けた要人の家族であり、なおかつ国の中枢にまで関わるような要人だった場合、大体の場所がばれている今、かなり追い詰められている状況になる。

全て仮定で成り立っているが、彼女の経歴を聞いていない現状では、最悪を想定して行動するしかない。

巻き込まれた形だったが、ここまできたら助けるつもりでいる。だからこそ今ここで、彼女の状況を伝えようとした。

03 持久戦

リーラに近づくと、ふっとした違和感。

俺はリーラに勢い良く飛び掛かり、そのまま覆いかぶさるようにして押し倒した。

「え?! ちょ、ちょっと! 何してんのよ! バカ、変態! どきなさい!」

腕の中でリーラが必死に押しのけようとしてくる。

「静かに! 狙われてる!」

耳元で注意すると彼女の押しのけようとする力が弱まり、体が強張るのを感じた。

「……ホントに?」

小声で確認してくる。不審な声音だったが、緊張しているのか、少し震えている。

「ああ。リーラはこのまま伏せていて」

彼女が小さく頷くのを確認してから離れ、ゆっくりと周りを見渡しながらか、いつでも動けるように頭を低くして屈んだ状態にまで体を持っていく。

目の端で彼女の頬が赤らんでいた気がしたが、すぐに意識から消えた。

……確実に誰かがこちらを見ている。

リーラを大急ぎで伏せさせたためか矢は飛んでこなかったが、何となく先ほどの男だろうと予想していた。

さすがにうつ伏せになった人を射るのはあの男でも難しいはず。そう思いたい。

鬱蒼と茂る森の中を相手の気配をゆつくりと探っていく。

居ない。

いや、どこかに居るのは分かる。だが位置がつかめない。

……仕方無い。

ゆつくりと、注意しながら立ち上がる。

「ちょっと、あんた！ 立ったら危ないじゃない！」

リーラが小声で心配してくれるが、男の位置を掴むにはこうするしかない。

つまり、自分を餌にして相手の位置を探る。もし射てきたら、それで十分場所を特定することが出来る。とはいえ先ほど飛んできた矢を切り落としただけに、射てくるかどうかは微妙なところだ。

それにしても三十メートルほどしか見えない中で、これほど気配を消して近づける者を久しぶりに見た。

じっと奴の攻撃を待つ。

リーラも異様な気配を察して、もう喋りかけてこなかった。

そよ風が吹き、木々がカサカサと小気味のいい音を立てた。

鳥の歌う声、獣の駆ける足音。

森の息遣いすら聞こえるような、静かで穏やかな空間。

段々と無駄な雑音が耳の奥から遠ざかっていく。

とうとう何も聞こえなくなり、しんとして小さな異音を聞き逃さないような状態になった。

全ての五感の集中を高め、ある種の第六感まで高めていく。

そして、待つ。

攻撃が来るまで、相手がミスをするまで、待つ。

分かる。

俺が緊張しているように、奴が緊張しているのが感覚として分かる。

分からないのはその位置。

持久戦だった。だが短期決戦になることは目に見えていた。

先に集中の切れた方が負ける勝負。

俺はこの周囲全域を探り、相手の位置を探る。奴は物音の一つも立てないように、俺の集中が切れるのを待てばいいだけだった。

しかも俺はリーラに矢が行った時の事も考えて、さらなる集中が要求される。

どちらの集中が長持ちするかなど一目瞭然。

小さく、ゆっくりと、息を出来るだけ長く吐いていく。

集中力が続く間に勝負を決めなければならぬ。

俺は体の中にある魔力にそろそろと手を伸ばした。

これほど集中力の要求される中、魔力を操るのは恐ろしく厳しいものがあるが、しなければ負ける勝負だ。

ゆっくりと基礎魔力のうち、風の魔力と土の魔力を少しずつ取り出して混ぜる。

風の魔力を使い、土の魔力を周囲三十メートルの位置、八方向へと運ぶ。

慎重な作業だった。

あの男に余裕を与えることは出来ない。常に集中力を最高まで維持し、位置を探っていく。

同時に一種類の魔力で別の魔力を飛ばすという荒業を行っていた。集中が途切れないように、ゆっくりと作業をこなしていく。

まず風の魔力で自分を中心とした八方向へ「流れ」を作る。

徐々に伸ばしていき、目標まで達した時には顔を汗が流れるのを感じた。

周囲からは未だ男の気配を感じるものの、位置はあいかわらず掴めない。

風の魔力で作った流れの上を土の魔力を移動させていく。
ゆっくりと、着実に、出来るだけ早く。

俺の集中力がいくらかも持つとは思えない。

焦りを感じそうになるのを抑え、冷静さを保つ。

肝要なのは自分を信じることだ。

それこそが一番の勝利への道筋だと信じている。

全ての飛ばした土の魔力が、目的地に辿り着いた。

この魔力は言わば種だった。魔力を吹き込むことで芽吹く種。

大きくゆっくりと、集中力を切らすことなく、深呼吸する。

腹に力を込め思い切り、

「ハッ！！」

魔力を込めた。

とたんに土の魔力が一度に増幅される。それぞれの周囲の草木が急成長を始め、巨木を作り上げていく。周囲に枝を伸ばしつつ、木の密度を大きく上げる。

太さが他の三倍はあるような木、そして高さは目立たないようにほとんど変わらない高さの木が八本。

鳥が飛び、動物が走り、木々が喚く。

森そのものが突然の仲間の成長に驚いていた。

そして驚いたのは何も森ばかりではない。

人も驚いていた。

リーラも目を丸くしていたし、あの男も驚いて気配を断つことを忘れてしまっていた。

七時の方向。

集中を維持していたため、問題なく捕らえた。

すぐに奴に向かって走り出す。

男も俺に気付いた。一瞬で弓を構え、射て来る。

後ろでリーラが立つ気配がした。つまり矢の射線上。俺が避けられ

ばリーラに確実に当たる。

すでに矢との距離は三メートルも無い。真っ直ぐに額へと向かってきている。

妙にゆっくりと飛んでいる矢だった。

残り二メートル。一メートル。

体を斜めに沈め、避ける。

矢の狙いが俺からリーラへと変更された。矢は頭の右上を通過し、一つの命を奪おうと進む。

瞬間、鞘から剣を抜いた。

抜いた勢いのまま、剣は右上へと移動し、矢を切り落とす。

男が顔を顰めたが動揺は無さそうだった。一度見せた技だ、予想はしていたのかもしれない。

一気に近づいていきながら、剣を持ち直す。

男は弓を捨て、佩いていた剣を抜いて構えた。十分、その道でも達人だろうと思える構え。

最後はさらに地面を蹴る足に力を込めた。

男の剣が横に振られ、俺の首筋を正確に狙う。一撃必殺を狙った攻撃だった。

頭を僅かに下げる。頭上を男の剣が風を切りながら通り過ぎた。がら空きになった男の全身。

その首へと真っ直ぐ剣を伸ばす。集中しきった神経には自分の動きでさえゆっくりとした動作に見えた。

「信じられない……」

何が信じられないのか。今起こった一連の全てが信じられなかった。

急にあいつに押し倒されたと思って焦っていたら、耳元で狙われ

てると囁かれて、言った本人は立ち上がって棒立ちになるし、しばらくそのままだと思っただけなら急に大きな木がいくつも生えてきて……あれは一体何……？

その後、あいつが追っ手に向かって行っただけ、あっという間に首に剣を突き立てて終わってしまった。

だからあの二人の直接対決より、急に巨木が現われたことが不思議でならない。

あいつが少し古そうな剣に付いた血糊を振り落としながら近づいてきた。

「ねえ、あんた……、何したの？」

どうしても訊かずに入れなかった。あいつは額に汗を浮かべながら、剣を鞘に戻した。

「何？ 魔術を見るのは初めてだった？」

「魔術？ あれが？ とっくに滅んだ、あれ？」

もう何百年か前に滅んだと聞いていたけど。
もしあれが本当に魔術だとしたら、これは大変な事だ。今や魔術を使える人は誰もいないと言われているのだから。

「別に滅んじやいないよ。使える人間が滅っただけで。それより、早く移動するよ」

「え？ なんで？」

「何でって……、それを訊きなすの？」

嫌そうな顔をされ、さらにはため息まで吐かれた。

「今の騒ぎが誰にも聞こえなかったと思ってる？」

「あ……」

言われてみれば、これだけ大きな音を立てておいて位置がばれないはずがない。

「まったく……。理解した？　なら行くよ」

「え、ええ。あ！　ちょっと待ってよ！」

先に歩き始めたあいつを慌てて追いかけた。

それにしても取り立てて特徴の無いような彼が、私よりいくらか年上でしかなさそうな彼が、魔術と剣を使いこなすことは驚きを通り越して、一種の恐怖にすら感じられた。

04 北へ向かって

ようやく陽が暮れ始めてきた。

敵らしい人物を見かけること十数回。魔術を使った簡単な罠を作ること約三十回。それもようやく終わりを告げようとしていた。

俺は木にもたれて、荒くなっていた呼吸を整える。

結局あの弓矢の男が一番きつかった。あれで体力を取られすぎて、体が少し重い。

「足、大丈夫？」

座り込んで痛そうに足のふくらはぎを揉んでいるリーラに声をかける。

「ん、なんとか……」

声も弱々しい。疲れと痛みですっかり参っているようだった。同じように俺も疲れていたが、今からが本番だった。とても休んでいられない。

今日のことを振り返ると思わずため息がでる。

俺は何でこんな目にあってるんだろう。いつも通りに釣りに行っただけのはずなのに……

あのおそらく達人を殺してしまったことで、下手をすると俺まで手配されたかもしれない。敵も見つかれば殺しつつ逃げてきた。どう考えてもまずい。

これ以上考えると本気で落ち込みそうなので、頭を振り、考えることをやめて気を取り直し、

「あと少し、頑張れそう？」

「……うん。大丈夫」

あまり大丈夫そうではない。とはいえ、ここからどの程度まで急ぐことが出来るかどうか。

「……言い忘れてた。今日逃げ切ったら髪、切ってもらおうよ」

「……髪？」

「長いからね。目立つんだ」

「そう、分かった」

特に抵抗も無さそうに言った。本当に気にしていないのか、疲れで正常な判断能力が無いのか、判然としなかった。

「そろそろ行こうか。手、掴んで」

「……うん」

素直にいう事を聞く。やはりこれは判断能力が失われていると考えた方がいい。

リーラの手をしっかりと掴み、魔術を使う。

今度は基礎魔力の一つ、闇の魔力。

「いい？　今、俺達の姿を見えなくしたから。声もある程度は抑えられるけど、出来るだけ小さくね」

リーラは黙って頷いた。

いよいよ体力がまずいのかもしれない。

彼女の手を引っ張り、森の出口へと向かった。

アミシラ樹海の北側。

途中からリーラを背負い、森の中に居た兵の何人かを闇討ちしつつ、ようやくここまで来た。すでに綺麗な満月が出ていて、夜の十二時を回った頃になっている。

目の前に四人の赤い服を着た兵士達がいる。目的の物である馬も人数分あって都合がいい。

「リーラ、大丈夫？」

「……………」

もはや返事も無い。

さすがに無茶をさせすぎたか。

「リーラ、ちょっと降ろすよ。しばらく待ってて」

すっかり気を失っているようだったが、一応声をかけてから木の根元に降ろした。

兵から死角になっているが、手は念のためリーラに置いたままだ。木の陰から兵を覗き込む。

あの兵の位置から良く見える場所で、かつ殺しやすい場所。できれば森の奥のほうが好ましい。

森の中にそんな場所があるか、ざっと目で探してよさ気な場所を見つけた。

風の魔力を使って火の魔力を飛ばし、その場所で小さく空間を燃やす。森に燃やしたら大変なのでそこは注意しつつ。

それでも弓の男と戦った時と比べて集中しなくていい分、随分と楽な仕事だ。

うまく兵が火に気がついたようで指を指した。火の魔力を断ち、燃えていた空間から火が消えた。

兵達が訝しんでいる。少し話し合った後、二人が森の中に歩を進

めていく。

思わず笑みが零れた。予想以上にうまく動いてくれている。待ち伏せするために先ほど燃やした空間の近くまで移動する。

兵達が近づいて来た。俺にはまったく気付いていない。

ある程度まで引き寄せ、その首をそれぞれ一閃で切り落とし、再び隠れた。

じっと隠れた場所から残った兵を凝視する。場合によっては面倒な手順を踏まなくてはならない。

そのまま待ち続けているとまた二人やってきたので、同じように首を切り落とした。

うまく行き過ぎて逆に拍子抜けだ。最初の二人が戻ってこないことを怪しんで、様子を見に来るとしても一人でだと思っていた。最後の一人は気を失わせてから森で殺すつもりだったが手間が省けた。場合によっては二人を同時に気を失わせなければならぬとも思っていたのに。

とにかく、邪魔な兵は全員片付けた。

リーラを再び背負い、馬の所まで行く。

三頭は森の中に逃がし、一頭だけ手元に残した。

馬に乗り、リーラを前に座らせるのは少々骨だったが、何とかなつた。

「さてと、行くか」

腕の中の頭一つ分ほど小さいリーラに声をかける。

リーラのいい臭いが鼻腔をくすぐり、多少戸惑いを覚えたが振り払うように正面を見据え、馬を駆けさせた。

「……ん」

「起きた？」

リーラが少し身じろぎしたので、声をかけてみた。

「……ここは？」

「アミシラ樹海から北に進んでるとこ。そして今は馬の上。時刻はそうだな、大体午前三時ってところかな」

「……アミシラ樹海の北？ それって国境から離れてない？」

不安とも不審ともつかない弱々しい声音を出す。

彼女を突き出して俺だけが助かるという手もあるから、不安になるだろうし不審も感じるのは当然かもしれない。

「離れてるよ。ローヌ川は元々国境ってこともあって船を着けることが許されて無いんだ。だからあの周辺に船は無い。国が出してる定期便以外はね。後は国境を渡るには橋しかないけど、どちらも警戒されてたら渡るのは不可能だよ。船を作るって手もあったけど、さすがに追いかけてる状況で不可能だし」

「……そう」

今後のことを訊かれるかと思ったが、特に喋る様子も無く俺にもたれてくる。

顔を覗くとどうも顔が赤い。

「……どうした？ 疲れたのかな？」

「……うん」

少しだけ呼吸が荒くなっている。

疲れが取れていないというよりもこれは……

リーラの額に手を当ててみて、思わず舌打ちしてしまった。

「酷い熱だな。悪い、無理をさせすぎた……」

よくよく考えてみれば、リーラの逃避行は昨日今日始まった出来事ではないはず。疲れがたまっていたのかもしれない。

「……あんたのせいじゃないよ。私が巻き込んだんだし」

「どこかで休ませないとまずいかな、これは」

「大丈夫よ、これぐらい」

「いや、どこかで休んで行こう。幸いにも当てはあるし」

「でも……」

「何より、この状態で逃げるのは不可能だよ」

どこかで倒れられても困るし、背負っていくわけにもいかない。馬は目立つからどこかで捨てるつもりなので、旅はより厳しいものになっていくのは間違いない。

「だからしっかり休んでもらう。いいね？」

「……うん」

リーラが大人しく頷いた。とりあえず納得はしたようだ。

それにしてもどんどんと状況が悪化している気がするが、気のせいだろうか……

「少し急ぐよ。俺の魔力もそろそろ切れるから」

「……魔力が切れるって？」

「姿を見えにくくしてるんだよ。隠密とか言われる魔術だけだね。方向を変えたことがばれたらまずいから、ずっと使ってるんだ」

これほど長時間、魔力を行使したことはここ数年無かった。

魔術の研磨は続けてきたが、そろそろ辛い。

魔力の残量を考えると陽が登るまで使えるかどうかという微妙なところだ。

それどころか、俺の体力も目的地につかまでもつかどうか。表に出さないようにしているが、かなり辛い。

「……そうなんだ。……ごめん、巻き込んで」

「……今更だね。もういいよ、どうしようもないし」

本当にどうしようもない。

反射的に助けてしまってから、実に苦労が続く。助けたのは昨日の朝のことだというのに。

何でこんなことになったんだろうと考えていると、リーラが赤みがかった顔を上げて、下から俺の顔を覗きこんできた。じゃれついた様な動作だったが、黒い瞳にはどこか真剣味がある。

「どうした？」

「……あんた、私のこと売って自分は助かろうとか、考えないの？
……私なら多分、そうするよ？」

気が弱っているのか、弱々しい言葉。

そして軽く言おうとしているが、不安に満ち満ちた言葉。

やっぱりその不安が付きまどっていたのか。

安心させるように少しだけ微笑む。

「しないよ、そんなこと。……追われてるのはリーラが悪いわけじゃないんだろ？　なら売るなんて事はしない」

——追われているのはリーラが悪いわけじゃない。

これは一体誰に言っているんだろう。

リーラに言っているのか、それとも……自分自身に言っているのか。

リーラしばらく下から俺の目を覗き込んでいたが、やがて再び正面を向いて俺にもたれかかってきた。

「……ありがとう。……カルシア」

極々小さな声で呟いたリーラの声はしっかりと俺の耳に届いた。

05 山中の家

もうあと一時間もすれば朝日が顔を出そうかという頃になってしまった。

右手のかなり遠いところには村が見えるが、静かというか、時間が時間なので人が見あたらない。単に遠くて判断出来ないだけかもしれないが。

馬はこの場所に来る前に逃がしておいたが、リーラを背負っているため目立つことは変わらない。

リーラの呼吸も、俺の呼吸も荒くなっている。どちらにしろ目立つなら、馬に乗ってくればよかったと多少後悔した。

だがそんなことよりも何よりまずいのは、もう隠密も使えず、魔力も完全に切れたという事だ。

この状態ではとても人前に出られない。

背中中のリーラの苦しそうな呼吸を聞きながら村を掠めるようにして進み、すぐ目の前の小さな山を登って行く。

疲れきった体にはさすがに辛かったが、急な斜面を三十分ほど登り、山の中腹の開けたところまで呼吸をさらに乱しつつ到達した。

もう俺まで倒れてしまいうさだった。頭がクラクラしている。汗が滴り落ちるのを感じた。

開けた空間に来た時、目の前に現われたのは、どこかローヌ川のほとりにある自分の家にも似たような家。

真っ直ぐに玄関に向かい、俺はその扉を無遠慮に叩く。ノックと
いうにはかなり荒々しい。

この時間ならもちろん寝ているだろう。
起きてくるまでとにかく何度も叩く。

「――どちらさんすか？　こんな朝早くに……」

しばらく叩き続けていると、家の中から眠そうな声が響いた。

「俺だよ、カルシア。悪いけど入れてくれ」

「……兄さん？　ちょい待ってて下さい」

とたんに家の中がドタドタと慌しくなり、少し待つと扉が開いて、一人の青年が顔を出した。

どこかのほほんとした黒髪黒目の青年だが、山暮らしのためか、かなり締まった筋肉をしていて、まるで野性の狼のような目つきをしている。

俺の姿を確認した青年は目を丸くした。

「本当に竜の兄さんじゃないっすか。どうしたんです、こんな時間に。しかも美人の娘さん背負って」

「セナク、悪いねこんな時間に」

「いや、竜の兄さんならいつでも歓迎っすけどね。でも本当にどうしたんすか？　魔力空っぽじゃないすか。そんな状態の兄さん、今まで見たこと無いっすよ」

「ちよっとね。それより『竜の兄さん』ってのはやめてくれ」

「俺にとっては兄さんは兄さんっすよ。あ、中どうぞ」

セナクが体を横にし、中に入るように促してくれる。

「ならせめて『竜の』ってつけるのはやめてくれ。お邪魔するよ」

中に入りつつ言う。

家の中は、物はほとんど置いていない。机や椅子のほか、ノコギリやら弓矢やらの、山で暮らすための道具が綺麗に置いてある以外に、この場所に似つかわしくない使い込まれたような剣が壁にかけられている。

「お前のベッド借りるよ」

「いいっすよ、どうぞ」

セナクの了承を得て奥の寝室へと入り、そのベッドにリーラをゆっくりと寝かす。

「兄さん、この凄い可愛い娘、誰なんすか？」

「さあ？」

「さあって……」

不思議そうに視線をやってくるが、俺も聞いていないのだから仕方無い。

俺が本当に知らない判断したのか、セナクは肩をすくめてまたリーラに視線を移し、心配そうな表情を作る。

「まあ何でもいいすけど、この娘しんどそうじゃないすか？」

リーラの顔は赤みがかっていて、呼吸も荒く汗も酷い。

「過労から来る熱だと思う。解熱剤とか無い？」

「確か薬草があったはずなんで、煎じてきます」

そう言うときセナクは寝室を出て行こうとした。

「あとは水とタオルも頼む」

セナクの背中に向かって言うと、はいという元気な声が返ってきた。

部屋を出て行った彼は、向こうの部屋でガサガサと探す音を出し

ていた。

「はぁ……」

セナクが部屋を出ると、大きく息を吐いてベッドの横に座り込む。ドカッという自分でも驚くような音がしたが、セナクには聞こえていなかったようで、相変わらず探している音が続いている。

リーラをベッドに寝かせ、セナクに薬を頼み、一気に気が抜けた。今日、——いやもう昨日か。全く酷い一日だった。

いつも通りに釣りに行っただけだったのに、どんどん自分の意志とは無関係に何かに、おそらく政争に巻き込まれていくのを感じた。

だからといってリーラを助けたことが間違いだったとは思わないが、どうにも自分の運命の数奇さというか、呪われているんじゃないかとまで思ってしまう。

面倒な場所に嫌気がさして、あんな場所で隠居のような生活を送っていたというのに。

もはやあの場所に戻ることも出来ない。

あの時、さっさと引き揚げていれば……

そう思う一方で、高揚している自分も感じていて腹が立つ。

戦いに嫌気がさしたのに、戦いに高揚している。巻き込まれていくことを心のどこかで望んでいる……

おまけに人間を嫌っていたはずなのに、こうして人間を助け、人間に頼っている。

このままだとまずい気がする。どこかでリーラと分かれた方がいいかもしれない。

リーラを助けたことに後悔は無い。一方で釣りをやめなかったことに対しての後悔は酷いものを感じている。

一体全体、どうなっているのやら。自分の中が矛盾だらけだ。すぐに釣りをやめていれば……

思考が同じ所を何度も行き来する。

しばらくそうやって昨日一日の事を考えていると、扉が開く音と共にセナクが姿を現した。

手には木でできたコップと水の入った桶にタオルがかかっている。

「兄さんも体調崩してるんすか？ しんどそうすね」

セナクが心配そうに訊いてくる。

心配をかけないように、俺は立ち上がろうとしたが、……足に力が入らない。

それでも顔を顰めながら、手をベッドにつき、無理に力を入れて立ち上がる。

「俺は大丈夫……。リーラの世話を……。頼んでおいて……。いいかな？」

声がかすれてうまく喋れない。

「リーラってこの娘のことっすね？ 任せて下さい。それより兄さんにも休んでもらわないと」

セナクが手に持っていた薬と桶をベッドの傍に置くと、俺を支えようと手を出してきた。

触られることへの僅かな嫌悪感。

思わず顔を顰めてしまい、慌ててセナクの顔を盗み見る。

「やっぱり全然大丈夫じゃないっすよ。早く横になって……。ああ！でもベッドも布団ももう無いっす。あとは毛布ぐらいしか……」

どうやら別の意味で取ってくれたらしく一安心した。さすがに頼

っておいてこの感情を察せられたくはない。

「……その壁まで、連れてってくれるかな」

部屋の隅を指差して申し訳無さそうにしているセナクに頼む。もはやこの動作だけでもかなり辛い。

セナクはわずかに不思議そうな顔をしつつも、部屋の隅まで連れてきてくれた。

ほんの三メートルほどの移動でしかなかったのに、セナクの肩に捕まってようやくという有様だった。

「ここで一体どうするんすか？」

「俺はここで寝る」

セナクの肩から腕を外し、壁にもたれるとそのままずると座り込んだ。

「こんなところでっすか？」

「ああ……」

座ったとたんに意識が朦朧としてきた。

腰に佩いている剣が鬱陶しくて、腰のベルトから外して抱くようにする。

「でもこんなところじゃ——」

「セナク……」

何か言いたげなセナクを遮る。

「俺のことより……、リーラを頼む……」

重たいまぶたを無理に開けて、じつとセナクの顔を見る。
やはり何か言いたげだったが、

「任せて下さい」

と、はっきりした声音で答えてくれたのを聞き、俺は安心して意識を失った。

06 家の中で

妙に体が重い。だが熱っぽいわけではない。

疲労で体が疲れきっているのが自分でも分かった。

ゆっくりとまぶたを開けると、掠れた部屋が目飛び込んできた。ぼんやりと何も考えず、部屋を見回すと、体にかかっていた毛布がずれ落ちる。

段々と焦点が合ってきて、徐々に頭の中がはっきりし始める。

ここはセナクの寝室。

一つある窓から陽光が差し込んできて目に痛い。

ゆっくり立ち上がる。体がギシギシと嫌な音を立てたが、どこかの調子が悪いというようなことは無さそうだった。

剣を佩きなおしながらベッドの上に視線をやると、リーラが静かな寝息を立てていた。

顔色が大分よくなっていて、とりあえず安心しほっと息をつく。

……最初に会ったときといい、リーラはずっと寝ている気がする。彼女から視線を外し、起こさないようにゆっくりと部屋を出ると、セナクが椅子に座り転寝をしていた。

ベッドをリーラのために使ったので、セナクも寝る場所を無くしてしまったことに気がついて、居心地の悪い心もちがした。

辿りついた時はそこまで考える余裕が無かった。

今起こすのはさらに後ろ髪を引かれる思いだったが、起こさないわけにもいかず、セナクに近づいていく。

そして体を揺さぶろうと手を伸ばすと、触れるより先にセナクが目を開けた。

「あ、兄さん。おはようっす」

のんびりとした挨拶をしてきた。起きたばかりというのに寝ぼけ

た様子も見せない。

「おはよう。悪いね、ベッド使わせてもらって」

言いつつ、向かいの椅子に座る。

「いやいや、兄さんのためとあればそれぐらい。……でもあの娘、一体誰なんすか？」

「聞いてないから俺も知らないよ。どうやら言いたくないみたいだ」
「へー、何か訳ありなんすかね？」

「だろうね。俺の予想だと、政争に負けた役人の娘ってところだと思う」

「せいそう？ 自分には縁の無い話しっす」

目を丸くして言うセナクに、思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「そうだね、俺にも縁がないよ」

セナクが一頻り笑い声をあげたが、急に真剣な表情を作った。

「ところで兄さん。その髪と瞳、どうするんすか？ 俺としてはその碧い髪も、緋色の髪も結構好きなんすけどね」

じっと俺の目を覗きこみながら尋ねてくる。

俺にとっても頭の痛い問題だった。

「魔力がカラだからね、どうしようもないよ。せめて後一日休ませれば余裕もできるけど」

「一日っすか。じゃあ今日一日はここにいろんすね？」

「俺よりもリーラのために三日ほどいようかと思ってるよ。セナク

には悪いけど」

いきなり尋ねてきて、おまけに寝場所を取り、どうにも居心地が悪いが頼るしかない。

「俺は全然いいですよ。三日と言わず、いつまでも大丈夫っす！」

「ありがとう。けどあまりゆっくりしている訳にもいなくてね」

「そうなんすか？」

「リーラが追われてるから。多分ついでに俺も追われてる」

「多分ついでっすか……。兄さんの魔力が尽きたのもそれが原因っすね？」

「ああ。巻くためにかなり無理した。おかげで髪と瞳の色も変えることができないよ」

「兄さんは今日一日、家の中にいた方が良さそうっすね」

「ところがそうもいかない。そうしたいところだけだね。リーラが知らないんだ」

「……あちゃーって感じっすね」

セナクが手で額を覆ってみせる。

「だからどこかで隠れていたいんだけど、いい場所知らないかな？」

「いい場所っすか？ んー……」

今度は手を顎に当てて考え込んでいる。

「いっそのこと、リーラって娘に話すってのはどうすか？」

「それは駄目。お前だって、本気で話したほうがいいって思っただいしょ？」

「まあ、そりゃ」

「それだと俺が家を出るしかない。まあ最悪リーラの前だけで魔力

を使うのもいいけど、余裕の無い状態でやってるとうまく魔力が回復しないんだよな」

「そうなんすか？ 初めて聞いたような」

「そうだった？ 言い忘れてたかな。それよりいい場所、どこか無いかな」

もう一度訊いてみるが、あまり期待はしていない。

「一応、隠れられそうな場所は思いついたっすけど……」
「本当か？」

だが予想に反した答えが返ってきた。しかしセナクの歯切れが悪い。

「あるにはあるんすけど……、ちょっとした洞穴みたいな場所なんすけどね」

「何か問題が？」

「熊の巣穴になってるんすよ、そこ」

「なんだ、そんなことか。確かに獣臭くはなりそうだけど」

大した問題でもなくて、多少拍子抜けだ。

「そんなことって……。まあそんなことではあるんすけどね。あ、臭いっいたら沢に案内しますよ」

セナクが渋面を作り、いかにも気の乗らなさそうな表情をしている。

「なんでそんなに嫌そうなんだよ」

「いや……、いざという時のための非常食として残してたんで」

「……なるほど、死活問題だね」

椅子から立ち上がりつつ呆れて言うと、つられてセナクも立ち上がる。

「まあ俺の食卓事情のことはおいとくとしても、いいんすか？」
「何が？」

扉を開けつつ訊く。

「いや、兄さんがあの洞穴に行ったら必然的に俺とあの娘だけになるわけで……。一緒にしといて、危険だとか思わないんすか？」
「危険？　なんで？　むしろリーラを一人にしといた方が危険だと思うけど」

「何でって……、そりゃ……。いや、何でもないっす。確かに兄さんの言う通りっす」

呆れたような、投げやりのような言い方で少し気になったが、それよりもリーラを一人でしばらく残すことの方が心配だった。
何も問題無ければいいが。

セナクの案内で二十分ほど歩き、山の窪みになったようなところにその巣穴はあった。

セナクはすぐに近づくようなことはせず、少し遠い高台のようなところから様子を窺っていた。

「あそこが熊の巣穴？」

「そうすよ。割とでかい熊なんで気をつけてください」

目を細めて様子を見ると、窪みのような場所に、ちょうど小さな洞穴のようなものができていた。

中が深いのか、浅いのか。広いのか、狭いのか。外から見る限りでは一切分からなかった。

しかし少なくとも入り口は熊が出入りするだけあって、人が十分入ることはできる。

「それにしてもこんなところにあるもんだな」

「そりゃ山の中っすからね」

「そうじゃなくて。随分とお前の家から近くないか？」

「あ、やっぱりそう思うすか？」

セナクが頭をかきつつ苦笑する。

「実は何度か家まで来たことあるんすよ。鍛錬にも丁度よかったんで、素手で相手してたんすけどね。でもその度に痛めつけてたら、そのうち来なくなったんで」

「そんなにお前、強かったっけ？ 最後に剣見たのは確か……」

「二年前っす。それで降面倒臭い言われて見てもえなかったっすからね。頑張りやした！」

セナクは誇らしげに胸を張り、俺は苦笑いするしかない。

身を守るのに必要な技術として教えてきたけれど、少し強くなりすぎたようだ。

最後に剣の稽古をつけた時で、かなりの領域に達していたはずなのだが。

剣の技術に加えて素手で熊を倒せるレベルになったというわけか。

「随分と強くなったみたいだね」

「師匠がよかったっすから」

セナクが満面の笑みを向ける。

実に無邪気な、子どもの頃のままのような笑みだった。

「さて、そろそろ行こうか」

洞穴を見据えて言う。

「そっすね。それで結局、どうするんすか？ 殺して寝場所奪うんすか？」

「……お前は俺を何だと思ってるんだよ。寝場所の確保ぐらいでそんなことするか。とりあえずは近づいて様子見かな。それから決めればいいよ。熊も中にいるみたいだし、ちようどいい」

「ちようどいいって何が……、あっ！ 先に行かないでくださいよ！」

高台を飛ぶように駆け降りると、セナクが俺の背中に向かって叫んだ。

07 迷子のリール

意識が朦朧としている。体がだるく、上半身を起こすだけでも妙に疲れて少し息切れした。体の節々が痛い。

目であいつの姿を探すが、どこにもいない。

「……カルシア？」

小声で呼んでみたものの、むなしく響くばかりで反応は無い。

うまく動かない体に鞭打ちながらベッドから降りて、一つある扉へと向かい、中を窺いながらそろそろと開ける。

誰もいない。

あいつが近くに居ない……。妙に不安を感じる。

「……ねえ、誰かいらない？」

少し大きな声を出してみたが、相変わらず反応は無い。

部屋の真ん中にある椅子二つが、どうにも誰か座っていたような様子を見せている。さっきまで誰かがいたのか、人のぬくもり、というようなものがまだ部屋に残っている。

周りを見渡すとノコギリに、弓矢。自然と背筋が震える。

壁には剣がかかっていたのを視線の端で捕らえた。

ここは本当に、安全なの……？

どうしよう。逃げた方がいいのか、待った方がいいのか……。

否応にも無く頭にはあの弓の男が浮かんだ。

森の中、射てきた男。逃げる私たちを追いかけてくる男。

そして映るのはあいつが弓の男に喉を突き立てた場面。

その後、追手に追い立てられながらも、私を庇いながら移動する場面。

……私の顔を心配そうに覗きこむあいつの顔。あいつは気付いていたのか、いなかったのか、凄い汗をかいてた。呼吸も乱れてた。それでもきつと、私をここまで運んでくれたんだ……

ならきつとここは安全なんだろう。そう思う。

でもあいつは？ あんなに疲れたような様子だったのに。ここに居ないならどこに？

もはや逃げた方がいいのか、待った方がいいのかという選択から、探した方がいいのか、待った方がいいのかという選択に変わっていた。

部屋の中には寝室への扉以外にもう一つ扉が付いている。

その扉に近づき、開けてみると外だった。森の中のように木が多い。

外に行ったのかな？

何しにだろう、疲れてるはずなのに……

自然と連想されるのは追手が来たのではないかという恐怖。

一度思いついてしまうと、それ以外の考えが一切思いつかなかった。

「……探そう」

恐怖を拭うようにポツリと呟いた。

家の中にかかっていた剣を取ってから外に出る。

探すといっても、そう遠いところまで行くつもりは無かったし、体も重くて、とても遠くにいけそうも無い。

だからこの近くを見て回るだけ。

もしかしたら遠目ででも見つけられるかもしれない。見つけられたら安心できるから。

いつの間にかこんなに依存していた自分に驚きながら、森の中へと歩を進めた。



俺は誰も居ない家の中、一人立ち尽くしていた。

「リーラ、ちゃん？」

呼んでみるが返事は無い。

それはそうだ、いないのだから。隠れるところも無いのだし。

「どこ行ったんすか……」

まずい。兄さんから預かっておいて、これはまずい。

俺の中にどうしても焦りが生まれる。

兄さんをあの洞穴に案内して、戻ってくるまで大体四十分ぐらい。

その間に起きて、どこかにふらふらへと出かけた？

それとも兵士が来て……

いや、それは無い。部屋が荒らされた様子は一切無い。

それじゃどこに、何故？

部屋の中でおろおろとしていると、突然ノックの音が室内に響いた。

リーラちゃんが帰ってきたのかもしれない。

そう思って喜び勇んで扉を開けたのだが、そこに居たのは全く別の人物が四人。

「あ、兵士さん。なんすか、こんな山の中まで」

思わず愛想笑いを浮かべてしまう。

赤い服を着た兵士が四人。自然と嫌な考えが頭に浮かぶ。

リーラちゃんが捕まって、それで匿っていた俺と兄さんを捕まえるに來たんじゃ……

笑みを浮かべつつ、体は臨戦態勢をとった。

兵士達が捕らえようと動いたら、反撃して全員殴り倒すか切り殺すか、どちらかをするつもりだったが兵士達に殺氣らしいものは無い。

「あんたがここの主人？」

一番年長の兵士が口を開いた。

「そうすけど」

お互いに友好的とはいえない声音。

「実はアミシラ樹海に重罪犯罪人が逃げこんでいてな」

「重罪犯罪人？ そんな人があの樹海に？」

危惧を抱いていた内容では無く、多少ほっとしつつ訊き返す。

とはいえ、無関係でも無い。ここまでの大まかな事情は洞穴に案内する時に兄さんから聞いた。

「ああ。今囲んで徐々に追い詰めているところなんだが、もしかしたらこちらの方面に逃げてくるかもしれん」

「追い詰めているのにつきるか？ とても簡単に逃げ切れるとは思えないっすけど」

「万が一の事を考えてだ。まあ問題無いだろうがな。それでもこちらの方に逃げ込んできたらすぐに報告をしてもらいたい」

「はあ。それはいいすけど、一体何したんすか？」

兵士がジロリと睨んできたが、そんなことで怯んだりはしない。
真っ直ぐに兵の顔を見返す。

「……人殺しだよ」

「人殺し？ それだけでアミシラ樹海を包囲するほど、兵士が派遣されるんすか？」

「殺した相手がよくなかったという事だ。これ以上はお前の知る必要の無いことだ」

これ以上無理に訊いても何も教えてもらえそうに無い。

「それじゃ、そいつの容姿だけ教えてもらえないすか？ それ聞いとかないと、来ても分からないっすよ」

「安心しろ、今から言う。年齢は十六で女」

「十六で女あ？ そんないかにも少女ってのが重罪犯罪人なんすか？」

わざと大げさに驚いてみせると、兵士が重いため息をついた。

「全く、物騒な世の中になったものだと思っよう。それで容姿の続きだが、髪は背中を覆うぐらいの長い黒。身長は平均的な高さ。大体お前さんよりも、頭二つ分ぐらい小さいな。あと、かなりの美人だ」

完全にリーラの容姿と一致した。

「へー、美人なんすか。……その女って強いんすか？」

兵士はおかしなことを訊くとしても言いたげに不審げな顔をしながら、

「いや、全く戦いは駄目だろうな。何故そんな事を訊く？」

「ならここまで来る体力自体も無いんじゃないっすかね？ 樹海から結構離れてるすから」

「ふん、そういうことか。まあ念のためだ。わしらも本気でここまです逃げてくるとは思っとらんよ」

兵士が面白く無さそうに言うが、セナクはほんと胸を撫で下ろした。

この言い様だと、本当にここまで逃げてきているとは想定していないのだろう。

だが兵士は何を思ったのかジロリと睨んできた。

「……一応家の中を調べさせてもらうが、いいな？」

有無を言わさない声音だった。

これが元々の予定だったのか、不審なところがあったため急遽決めたのか、俺には判断がつかねた。

「どうぞ」

体を横にやり、兵士達が中に入れるようにした。

リーラは今居ない。全く問題の無いことだった。

兵士達が軽く家の中を見ていく。

「ここには一体何が掛かってたんだ？」

兵士の一人が指差して訊いたその先は、いつもなら剣が掛かっているはずのところだった。

ここで初めてセナクは剣が無くなっていることに気付いたのだが、

「そこには剣をかけてたんすけどね、最近折れちゃって」

口からはしれっと嘘が出た。内心で驚いているなんて、この兵士達には分らないだろう。

兵士はこんなところに剣が、と驚いた様子だったが山の中で何かしら必要なだろうとでも考えたのか、納得した様子だった。

奥の寝室へと移動する。

年長の兵士がベッドに手を置いた。何をしているか、一目瞭然だ。ベッドにぬくもりが残っているかどうかを調べている。

兵士達が来て、すぐに逃げたのかどうかを確かめているのだろう。だがベッドにはとくに人のぬくもりは消えて冷たくなっている。こうなるとリーラが抜け出したのは都合が良かったかもしれない。次に窓へ移動し、じっくりと調べている。

「特に不審なところは無いか」

あの年長の兵士がポツリと声を落とした。

「時間取らせて悪かったな。わしらはもう帰るよ」

兵士達が移動していき、再び家の外に戻った。

そのまま帰るのかと思ったが、思い出したように年長の兵士が振り返って、

「そういやこの辺りに熊出るんだってな。麓の村から熊が降りてくるから退治してくれて頼まれてるんだが、お前熊の住処知ってるか？」

「熊が出るのは知ってるすけど、住処は知らないっすね。残念ながら」

まだあそこには兄さんが居るのに行かせるわけには行かないですよ。
心の中でそう思いつつ、嘘を付いた。

「そうか。まあ近々退治しに何人か来るから、それまで気をつけて
な」

そう言うと、四人の兵士は立ち去っていった。

俺は愛想笑いを浮かべつつ、これは面倒なことになったなあと心
の中でぼやいていた。

08 帰宅

「全くあいつは何やってるんだよ……」

落ち着き無く歩き回りながら、思わず出てしまう怒りに満ちた声。家の中で待っていればいいものを、わざわざ出て行く意味が分からない。

とはいえ、そのおかげでとりあえずの危機から脱したことを考えると、一方的に怒るわけにもいかなそうだ。

洞穴から戻ってきてから三十分ほどが経っていた。

セナクがリーラが消えた慌てて報告をしてきた時から、すでに一時間は経っている。

おまけに熊狩りを始まるとかで、あの洞穴にもいるわけにはいかなくなっていた。

今すぐどうこうという訳でもないだろうが、念のためこうして再びセナクの家に戻り、待機していた。

「……やっぱり俺も探しに行くべきだったか？」

この山を熟知していない俺が探しに行くのはむしろ迷う可能性があって危険、と言ったセナクの提案を受け入れてこうして待っているが、歯がゆいことこの上ない。

確かに分かるのはせいぜい、この洞穴からセナクの家まで。他には登るルートと降りるルートぐらいか。

おまけに熊の住処を探している兵士まで居る可能性すらある。鉢合わせしたら大変なことだ。

そう思って待っているのだが、未だ帰ってきた、見つけたという報告をセナクは持っていない。

もしかしたら、先に兵士達が見つけたのかも……

どうしても思考がそっちへと行ってしまう。

一時間で見つけろという方が無茶かもしれないが、イライラして仕方が無かった。

自分のイラつきを発散させるように歩いていると、ふと微かに気配を感じた。集中力を欠いている今、感じられる範囲はそう広い。

この気配はあの熊か。でももう一つは？

髪と瞳の色を黒にし、扉を開けて顔を出してみる。

あの洞穴の主である大きな熊がのっそりとした動作で近づいてきた。背中には一人の少女を乗せている。

「リーラ！」

いろんな意味で驚いた。

カルシアは普段から動物に警戒心も抱かれず、むしろ好かれてきたが、熊とも本当に仲良くなれるとは思っていなかった。

あの洞穴には当初、力づくでも入り込めばいいとも思っていたのだが、問題なく入れてくれた。

しかも駄目もとでリーラを探すよう頼んでみたら、まるで言葉が分かったかのように洞穴から出て行き、しかもこの結果。

驚くなという方が無理というものだ。

「本当に見つけてくれたんだね、ありがとう」

走って近づき、名も無き熊に声をかけ、頭を撫でてやると嬉しそうな声をあげた。

「リーラ？」

顔を見ると、かなり赤い。呼吸も荒くなっていて、確実に悪化し

ているのが見て取れた。

どこかで気を失って倒れていたのかもしれない。

「……あまり良くないな」

リーラの額に手を当ててみると、かなり熱い。

舌打ちをしつつ、リーラを抱き上げる。

「ありがとうな」

もう一度撫でてやりたかったが、リーラを抱いている今、それもできない。

だが目の前の大きな友人は全て分かったかのように頷く動作をしてみせた。

「後、お前はもうこの山を出た方がいい。人間がお前を狩ろうとしているから、ここにいたら危険だよ」

言っている事が分かるのだろうかとも思いつつ、言い聞かせるように言うのと驚いたことに、熊の瞳に悲しそうな色が浮かび、一つ頷くような動作をするとそのまま去っていった。

熊の悲しそうな背中を見送り、再び中に入ろうとした時、

「兄さん！」

「セナクか」

ちょうど帰ってきたセナクに声をかけられた。

「戻ってきてないか様子を見に来たんすけど、兄さんの方が見つけたみたいすね」

「俺というより、あの熊がね」

「へー、あの熊が。よっぽど利口だったんすね」

「そうだな。それよりも」

「はい、早くベッドに」

改めて扉を開け、すぐに寝室へと向かいリーラを寝かせる。
彼女が腰に佩いていた剣は取り上げておいた。

「確実に悪化してるっすよね？」

「だろうね。土の魔力を使えば回復を早めれるけど」

「使えない……んすよね？」

「……まだほとんど魔力が回復して無い」

苦々しい口調になるのを抑えられない。

「……また解熱剤飲ませときます」

「ああ、頼む」

セナクが一度部屋を出たが、すぐに戻ってきた。今朝とは違い、すでに準備は整っている。

「うまく飲んでくれるといいんすけど。前も結構苦労しましたし。口から零れたら拭いてもらっていいですか？」

言いながらタオルを突き出してきたので、それを受け取る。

セナクは片手でリーラを起こし、コップを彼女の口につけて飲ませようとしたが、やはり口の端から薬が零れてしまう。

布団につかないように、俺はすぐにそれを拭いた。

その後も何度か同じことが続き、段々とじれっなくなり、

「貸して。俺がやる」

「兄さんがっすか？」

ひったくる様にしてセナクから薬を受け取ると、今度は俺がリーラの頭を片手で少しだけ持ち上げる。

そして反対の手に持った薬を自分の口に含んだ。

セナクの驚いた顔がちらりと目に映る。

「何を――」

セナクが何か言うより先に、俺はリーラと唇を合わせた。

「んっ……」

リーラが少し呻いた。

俺はゆっくりと口移しで薬を飲ませていく。

口に含んだ分全て飲ませると、ようやく唇を離す。

セナクが非常に気まずそうな様子を見せていたが、何かあったのだろうか。

少し気になったものの後で聞けばいいと思い、作業に戻る。

コップの薬を再び口に含み、口移しで飲ませていく。

何度も繰り返し、時間がかかったが何とかコップの薬を全て飲ませることができた。

最後の一口を飲ませると、やはりセナクが気まずそうな表情をしていた。

俺はまるで言い訳のように、

「こっちの方が早いからね」

ふうと一息つきつつ、呆れたような表情をしたセナクに言った。

「兄さん……」

セナクが視線を泳がせつつ、困ったような目を向けてくる。

「何？」

「いや……。今の口移しのこと、リーラちゃんに言わない方がいいですよ」

「ん、何で？」

「何でってそりゃ……。まあ兄さんが理解しにくいってのは分かっているんですけど」

セナクの言いように、どうにも不安になる。

「俺、まずいことしたか？」

「はい、まあ……」

「そうか……。なら言うとおりにしておくよ。……やっぱり人間はよく分からないな」

後半はほとんどぼやくような声になってしまった。

「とりあえず隣の部屋に行かないすか？　リーラちゃんもとりあえず落ち着いてますし」

「……そうだな」

二人揃って部屋を移ると、二つある椅子に腰掛ける。
どちらからともなく、大きなため息が出た。

……異常なほど疲れた。

「これからどうするんすか？」

「どうしようかな」

「また洞穴に戻るんすか？」

「何のために戻ってきたと思ってるんだよ。兵士がうろちよろして
るのに、戻るわけ無いよ」

「そうすよね……」

俺はまた大きくため息を漏らした。この調子でリーラを国外に逃
げ出すことができるんだろうか。

「……全く。初めてみたときは生意気な女だと思ったんだけどな。
急に怒るし、人の食事は勝手に食うし。それが今じゃこんなに……、
何笑ってるんだよ？」

いつの間にか口元ににやにやと笑いを浮かべているセナクをねめ
つけると、慌てたように両手を体の前に出して振り、

「いやいや、別におかしくて笑ったんじゃないすよ。昔から変わっ
てないなり、って思ったんす」

セナクが懐かしそうに目を細める。

「……そういやお前と初めて会ったときも嫌々だったっけ」

「そうそう。ずっと不機嫌そうな顔して。それでも助けてくれたん
すよね。今の兄さんも同じっすよ。困ってたら助けるし、弱ってた
ら心配するし。悪く言えばお人好し、よく言えば弱いものの味方っ
てところすかね」

「……悪く言えばってのは余計だね」

苦笑しつつ言う。

「確かにそんなところはあるけど」

「そこが兄さんのいいところっすよ。ところで話を戻しますけど、どうします？」

「そうだな……。とりあえず土の魔力が十分使えるまで回復させたところだけど」

「で、回復させる間はどこで待つんすか？」

「ここ、だろうね。……俺がこっちにいるから、セナクが寢室でリーラ見ててくれる？」

「ああ、なるほど。リーラちゃんが起きたら兄さんに声かけるってことっすね？」

セナクが納得したように頷いた。

「そう。その間はこっちで魔力の回復をじっと待つ。窓がある分、ちょっと心配なところはあるけど。最初からそうしてれば良かったな」

わずかばかりの後悔。

最初からこっちを選んでいたら、きっとリーラも無茶をすることもなく、風邪を悪化させるようなことも無かった。

代わりに、兵士達の追及を逃れるのは難しかっただろうが。

「ま、今更後悔しても仕方無いすよ」

セナクが慰めてくれたが、思わず三度目の重いため息が出てしまった。

09 国王暗殺（前書き）

七話後半から訂正しています

09 国王暗殺

森の中、精神を集中する。

自分の中にあるそれぞれの魔力に手を伸ばした。

最初は火。次に水、風、土、金の順に。

それを体の中で巡らせ、魔力を充実させていく。

心地よい魔力。もはや体という殻を破っていきそうな魔力。

だが普段に比べてかなり弱々しいことを嫌でも察してしまった。

「ふう……」

水以外の魔力を手放し、力を抜いた。

「どんな感じっすか？」

少し離れて家にもたれながら見ていたセナクが声をかけてきた。

「そこそこ戻ってるけど、やっぱり普段の調子には程遠いね」

「でも髪と瞳の色は常時変えれてるみたいすね」

俺の黒髪と黒目を見ながら安心したように言った。

「まあそれぐらいはね」

家の扉を開けながら答えて、そのまま中に入る。セナクも後ろに続いた。

真っ直ぐ寝室へと向かい、ノックもせずに入るとリーラがベッドの上で横になっていた。

「鍛錬終わったの？」

リーラが少ししんどそうな声を出す。

「ああ。軽く魔力を巡らただけだから」

彼女と出会った当初に出たような冷たい声音にはならなかった。
すでにあれから五日経っている。

リーラは順調に回復しているがまだ動けそうに無い。というより、
動かないように見張っていた。

これで動かして、またぶり返したら全く意味が無い。

「当初の予定だともうここを出ているはずだったんだけどな」

「うるさいわね。悪かったわよ、無茶して」

ぶすつとした声をだして顔を背けた。

「とりあえず治療するからこっち向いて」

「ん」

リーラがすぐに背けた顔を少しだけこちらに向けた。

その額に手を置くと土の魔力に手を伸ばし、額に触れた手を通じて
リーラの中に魔力を流し込む。

「魔術って便利よね。これで治療してるんでしょ？」

リーラが不思議そうに訊いた。

「そうっすよ。こうやって魔力を流すことでリーラちゃんの中の自
己治療力を高めてるんす。兄さんが今使ってるのは土の魔力。これ

には促進の特質を持ってるんで、生物に対してかなり有効に作用するんすよ」

集中している俺に代わってセナクが答えた。とはいえ俺も喋れないほど集中しているわけでもなかったのだが。

「土の魔力？ 特質？」

「そ。魔力には全部で七種類あるんすけどね、それぞれに決まった特質があるんすよ。魔術ってのはそれらの特質を踏まえたうえで、魔力を混ぜて使うのが普通なんす」

得意そうに説明を続けるが、セナク自身はたいして魔術を扱えない。教えようとしたが、どうにも性に合わないらしく、結局使える魔力はたった一つだけ。

それでも理論と知識だけはちゃんと頭に入っていたようだ。

「終わったよ」

話を打ち切るように俺が言った。

「ん、ごくろう。大分楽になったわ」

……半分以上演技なのだろうが、何故か腹が立つ。

大分本調子を取り戻してきているようだ。

それに伴い、腹の立つ言動が多くなるのはどうしたものか。

「しっかり寝てろよ。俺達は向こうの部屋にいるから」

「分かってる。大人しくしてるからさっさと行ってよ。女の子の寝てる姿ってあんまり見るもんじゃないの」

俺は肩を落とすとリーラに背を向けて寢室を出ようとしたが、ふと思い出して振り返り、

「忘れてた。国王が死んだって情報が出てるんだけど、何か知らない？」

「……え？ おとー。知らない」

少しだけ青い顔をして何かを言いかけたリーラだったが、口をつぐみ、そっぽを向いてしまった。

だが俺には言いかけた分だけで察するには十分だった。

「……おやすみ」

一言だけ声をかけて俺とセナクは寢室を出て、いつもの椅子に腰掛けた。

セナクは妙に深刻そうな表情をしていて、おそらく俺も同じような表情をしているのだろう。

「リーラちゃんって、姫さんだったんすね」

セナクが小声で言ってくる。

「多分」

俺も小声で返した。ただの政争と思っていたが、予想以上に大きい事態のようだ。何しろ国王が殺されている。

この情報をもってきたのはセナクだった。

政争関連なら何か情報が出回っているかもしれないと思い、探してきてもらったのだが、その結果分かったのが国王が死んだという情報だった。

暗殺かもしれない、という情報と一緒に。

リーラが巻き込まれている問題に関係あるかもしれないと思い、反応をみようとしたのだが予想以上の反応だった。

「今の実権は誰が持ってるんだ？」

ふと気になったことを口にした。

実権を手に入れた奴が暗殺をした可能性が高いのは自明だ。

「宰相のガルトだろうってことっす。さすがにこの辺りまで詳しい情報は流れてきてないんで、何とも言えないすけど」

「宰相のガルト、ね。まあこれでとりあえずリーラが何で追いかけてるかは、ある程度分かったね」

「えっ！ 分かったんすか？」

セナクの声が少し大きくなり、俺は人差し指を自分の口の前で立てた。

セナクは慌てて両手で口を塞ぎ、寝室の扉を見る。

リーラの動いた気配も無く、聞こえなかったのだろうと少し安心した様子で、セナクはほっと息を吐いた。

「リーラが関わっているって前提で、いくつか予想できるって程度だけど。リーラがガルトの暗殺の証拠を握っている場合。ガルトが他のところに権力が行かないように、先王の子を亡き者に、もしくは捕らえようとしている場合。……リーラが先王を殺し、逃げている場合」

「兄さん？」

セナクの怪訝そうな表情と声。

「最後のは時期的に見ても無い、か」

「いや、そうでも無いかも……」

馬鹿らしいとばかりにすぐ否定した俺の言葉を、妙に深刻そうな表情のセナクがさらに否定するように言った。

「どういうことだ？」

「実は王が死んだのって結構前らしいんす。どの程度かは分からないすけど」

「……そうか。王が死んだなんていったら、混乱になりやすいからな。しかも暗殺。しばらく隠してたのかもしれない」

「これからどうするんすか？」

やはり深刻そうな表情をしながら訊いてくる。

当然だ。下手をすると国王を殺した犯人を逃がす手伝いをすることになるのだから。

「予定通り、リーラを助けるよ。少なくともこの国からは脱出させる。とりあえず後一週間ほど休んでから、当初の予定通り港町のリティアに向かうよ」

「いいんすか？」

「……なら訊くけど、お前にはリーラが人を殺すような娘に見えた？」

「いや、それは……」

セナクが目を伏せて言い淀む。

「だからいいんだよ」

笑みを浮かべながらきっぱりと言い切ってやると、セナクがため

息を漏らした。

そして彼は笑いをかみ殺しながら、

「兄さんは相変わらずっすね〜」

俺は苦笑するしかない。全く自分でもお人好しだと思うからだ。
和やかな、落ち着いた雰囲気が部屋を包んだ。

だが遠くから人が近づいてくる気配を感じ、この空気を払拭する
ように表情を引き締めた。

「誰か来たみたいだね、まだ少し遠いけど」

「そうなんすか？ 自分にはまだ分からないすけど」
「まだ未熟だね」

椅子から立ち上がり、寝室へと移動すると横になっていたリーラ
が驚いたような目を向け、のっそりした動作で半身を起こした。

「どうしたの？ ノックもしないで」

「人が来る。多分兵士かな、窓の傍で身を隠すよ」

とたんにリーラの表情が強張った。

「俺もこっちの部屋で身を潜めておくから、後は頼む」

後ろにいるセナクに言うのと、彼は胸を叩き、

「任せといて下さいっす！ 部屋の中は前回来た時調べていきまし
たし、何とかなるっすよ」

かなり威勢よく言ってくれる。

「それじゃ俺達はこっちで潜めておくから。リーラ、こっちに」

扉を閉めリーラを招きよせると、彼女がベッドから降りて近づいてきた。

やってくる気配の位置から見えないだろうところを選び、二人揃って窓の傍で身を潜める。

隣のリーラの体が強張っているのがよく分かる。本来、こういう命がけで身を隠すというようなことは、あまり慣れていないのだから。

しばらくそのまま息を殺していると、コンコンとノックの音が響いた。

10 兵士

「はいはい、どちらさんすか？」

向こうの部屋からセナクの陽気な声に、扉の開く音。

「あれ？ こないだの兵士さんたちじゃないすか、またどうしたんですか？」

「すまんね、またお邪魔して」

渋い声。初老とはいかなくとも、すでに若くは無い兵士のような。

「いえいえ、それぐらい全然構わないっすけど、なんすか突然」

「実はまたあの熊のことなんだがね」

熊と聞いて俺は内心ほっとした。

とりあえずリーラのことでも来たわけでは無さそうだ。だからといって安心できる事態になったわけではないが。何が原因でばれるか分かったものではない。

「山の中に住んでる君なら熊の住処の場所分かるんじゃないかと思っतेね。正確な場所でなく、大体でいいんだが」

「はあ、大体の場所でいいならそれなりに見当はあるっすけど」

セナクが慎重に言葉を選ぶのを嫌そうな口調をして隠す。

「その辺りでいいから案内頼めるか？ 住処を探していたんだが、どうにも見つからなくてね」

「……大体の場所でもいいならいいすけど」

本当は嫌だけど、という意志が言外に滲んでいるが、兵士は気付かなかったのか気にして無いのか、

「それじゃ頼む」

と、一言だけ感情の見えにくい声で頼んだ。

その後すぐに、がやがやと出て行く音がし、危惧していたような事態にならず、無事に済んだと思ってほっと一息吐いたのだが、扉の閉まる音が聞こえる前に先ほどの兵士が、

「ん、あの剣はどうした？」

「え？」

「この間は何もかかっていなかっただろう？」

俺はあの後、リーラが剣を持っていたのを思い出した。

後からセナクに訊いたら自分のだと言い、壁に剣をかけていた。

リーラが居なかった間に来た兵士達は、当然何もかかっていない状態を見ていたはずで、セナクは折れたと言い訳したと聞いている。

となれば今、あそこに剣がかかっているのはおかしいわけで……

これはまずいかもしれない。

「あの剣ですか？ 新しく買ったんですけど、どうかしました？」

「新しく？ にはしては随分と使い込まれているようだが」

「そりゃ中古っすからね、使い込まれてて当然」

「中古？ 新しいものは買わなかったのか？」

「お金無いんで」

よくもまあ、スラスラと嘘が出るものだ。

「ふ〜ん……、どこで買ったの？」

「麓の村っすけど？」

「あの村、武器屋なんて無いよな？」

「えっ、そんなはず無いすけど」

かなり苦しい。その場しのぎの嘘以外の何物でもない。
これはいよいよ選択を迫られるかもしれない。

「無いな。偶然だがわしも丁度あの村で武器屋を探していたな。無いことは確認済みだ」

「……………」

とうとうセナクが黙ってしまった。

「どうやって手に入れたのか訊きたいところだが、先に家の中をまた調べさせてもらう」

兵士達が家に入ってくる音。

見つかるのは時間の問題、どこかその時間も無く確実に見つかる。この家で隠れられそうなところなど、寝室ぐらいしかないのだ。
……どうする？

頭の中に様々な選択肢が思い浮かんだが、どれもこれも最良には程遠い。

頭の中を様々な選択が巡る中も、気配がどんどん近づいてきて止まる様子が無い。真っ直ぐこちらに向かってきていた。

リーラが俺の腕を掴み、小さな震えが伝わってきた。

気配がもう部屋の前までやってきている。

俺は意を決し、心配そうな瞳を向けていたリーラの頭に、ポンと安心させるように手を置くと、扉の横に立ちその瞬間を待った。

兵士達が扉の前までやって来た。

ノブが動く。

が、扉が開く前に向こうの部屋で空気の動く気配がし、続いてドサツと何かが倒れる音。

空気が動いたと感じたのは、闘気が放たれた結果だと経験で分かった。

「貴様、何をする！」

とたんに伝わる兵士達の喧騒。何が起こったか明白だった。

事態を大方把握すると俺は扉を開け、目の前に居た一人に手刀を繰り出し、意識を刈り取る。しっかりと意識がなくなったかどうかの確認もせず、突然の乱入者の出現で無防備を晒していた次の一人へと同じように手刀を繰り出し、意識を刈った。

残り二人はセナクがすでに片付けている。

「兄さん、お見事っす」

セナクが引きつった笑みで愛想を取るが、それどころではない。

「これ、大丈夫なの？　どうするの？」

寝室からひょっこりと顔を出したりーラが心配そうにしている。

「セナクが先に手を出したから仕方なく、な」

「兄さん、そりゃあんまりっすよ！」

「……冗談だよ」

おそらくこうする以外に手は無かった。少なくとも見つからなかった。

最初にセナクがおそらく後ろから兵士の一人を襲い、気を失わせ

たので、さしたる抵抗も無く四人全員の意識を奪ったが、この後どうすればいいか。

床に伸びている四人に目をやりながら考えるが、どうにもいい方策が思いつかない。

「どうしようか、これ」

セナクがつま先で兵士の一人を突きながら困ったように訊く。

兵士達はしばらく起きそうにも無い。

「どうしようかな。一応訊くけど、気を失わせたただけだよな？」

「もちろん殺してないっすよ。殺すのは後からでもできるすけど、生き返らせるのは無理っすからね」

とんでもない理由だが、真理だろう。

確かに殺したあとで生かしておくべきだったと後悔するのは最悪だ。おまけに今は殺す必要すらあまり見つからない。

「縛って逃げちゃえばいいんじゃないの？ それか殺して口封じとか」

リーラがその綺麗な顔に似合わずきつい提案をしたが、セナクがかぶりを振って即座に反論する。

「それはまずいっすよ。だってこれからリリティアに向かうんすよね？」

「ええ、そうよ」

「てことは船を使うんすよね？ もし縛って逃げた場合、仲間の兵士達がここにやってきて助けるってのは予想できるすよね。ならその後どうなるか」

「どうなるかって、……助かって終わりじゃないの？」

セナクが首を横に振る。

「そんな簡単な話しじゃないんす。その後すぐに情報が飛ぶつすよ。リリティアだけじゃなくて、あちこちの国境にも。今、リーラちゃん達が樹海に居ないかもしれないって疑い始めている状況なのに、不審人物の情報がこんなところで出たら、疑いを持つのは当然すよね？ そうなればせつかく油断してるのに、防備が固くなって渡れなくなるつすよ。殺しても同じことつす。船なんて使えるわけ無いすよ」

リーラはむうと喉の奥で唸ると黙ってしまった。

樹海から逃げたかともという情報は二日ほど前から流れているのだが、まだ噂の域を出ていない。

しかも逃げたといっても、国境の向こう側へ逃げたのかもしれないという噂で、国内に戻っているという噂は皆無と言っていい。

魔術を使えることが分かっているだけに、川ぐらい渡れるだろうという判断なのだろう。

そしてそれはカルシアの狙い通りの展開でもあった。

だが今回の事で無駄になるかもしれない。

それを聞いたリーラは俯いて何かを考えていたのだが、「それじゃ」と言って言葉をつなぐ。

今回の原因が剣を持ち出したリーラにあるだけに、責任を感じているのかもしれない。

「魔術で記憶を変えたりとかって無理なの？」

リーラが小首を傾げながらも真剣な表情で訊いてきた。

それは一応俺も考えたことなのだが、

「無理。魔力がとても無いし、記憶の改竄ってのは難しいんだよ。しかも人が本来持つてる魔力に段々と打ち消されていって、絶好調でもせいぜい二週間ぐらいしか持たない。まあ、今回みたいなのは二週間持てば十分なんだけど。何にしても今の俺の魔力だと、大体三日間ぐらい誤魔化せるかどうかってところだな」

「そう……」

リーラが残念そうに肩を落とした。

「セナクは何か考えある？」

「んー、リーラちゃんのと似てるんすけど、殺して埋めるとか？」

実に物騒な提案を生真面目に言うセナクである。

「……まじめに考えて無いだろ」

「いや、考えてるっすよ。結局、こんな状況になったんすからうやむやにするのが一番なんすよ。だから殺して埋めてしまえば、ここで何があったのかも分からず問題にもならない」

今度はリーラがはあっと心底呆れた様子でため息を吐いた。

「あのね、あんた国の兵士を舐めてない？ 兵士が突然行方不明になったら調べるに決まってるでしょ。しかも同時に四人。ここで何かあったなんて簡単に想像できるじゃない」

さすがに姫様らしく、いや、姫様としては意外な事に国の兵士の質は分かっているようだ。大抵はそんな些事など知らないものなのだが。

「……リーラちゃんのせいでこの状況なのに、よくそんな口利けるすね」

「う、うるさいわね！ それにあんただって村の人に顔知られてるんでしょ？」

「その点は大丈夫っすよ。村の連中とはほとんど関わりなかったんで、知ってる奴なんてほとんど居ないっす。情報取りに行ったときも盗み聞きに終始したぐらいなんで」

「……寂しい奴」

うっとセナクが呻いたが特に反論はしなかった。本気で傷ついたのかもしれない。

その後もなんやかんやとリーラとセナクの二人は、色々と思いついた作戦をほとんど口喧嘩に近いやりとりで言っていたが、俺の耳には届いていなかった。

セナクの一言からもしかしたら、という一つの考えが浮かび、構っている暇が無いのだ。

「うやむや、か……」

「あ、なんかいい作戦思いついたんすか？」

思わず口に出して言った俺の言葉を耳に止めたセナクが即座に訊いてきた。

「多分、うまくいくと思う」

隙は無いだろうかと考えつつ答える。

「ホント？　どんなの？」

二人が身を乗り出してきて、思わず苦笑した。

こんな時は実に息のあった二人だ。

「笑ってないで、どんなのか教えてよ」

リーラがせがむ。

「この作戦、セナクの許可がいるんだけど」

「そうなんすか？ でも兄さんの考えた作戦っすよ、俺が断る訳ないじゃないっすか」

胸を張ってセナクが言ったので、その考えが本当に変わらないかどうかという悪い思いを抱きながら、俺は二人に声を潜めて作戦を伝えた。

たっぷり時間をかけて説明を終えると、リーラはできるのかと首を傾げ、セナクは快くとはほど遠そうな引きつった笑みを浮かべながら、この作戦を了承した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4354z/>

姫の守り神

2011年12月27日01時22分発行